

それから、“霊”はイエスを荒れ野に送り出した

イエス様は公の働きを始める前に荒れ野にとどまって断食しながらお祈りをなさいました。皆さんがご存知の通り、荒れ野は砂漠のように雨がほとんど降らない不毛地なので、木や草などはほとんどありません。食べ物はもちろん、飲み水もほとんどなくて人が住むことができないところです。ところでなぜ、イエス様はこのようなところで断食しながらお祈りをなされたのでしょうか。少し安全なところでお祈りをする方が良いのではないのでしょうか。そしてわざわざ断食しなくてもお祈りはできるのではないのでしょうか。平凡に生きる人にとっては誰もがこのように思うことでしょう。

けれども、現実を見ると、イエス様のように荒れ野に行って断食しながらお祈りをする信仰者もいれば、修道院や聖なるところに行って、夜を通して、断食しながらお祈りをする信仰者も多いのです。ある意味では愚か者のようにさえ見えます。なぜ、信仰者たちはこのように愚かなことを続けているのでしょうか。

遠く出エジプトの出来事から考えてみましょう。神様はエジプトで奴隷生活を送っていたイスラエルの民らを救い出してくださいました。エジプトの軍隊が追いかけて来ましたが、紅海を渡って脱出することができるよう助けてくださいました。40年間、荒れ野の生活を過ごしていた時、神様はマナとウズラを与えてくださり、岩を打って水が出るようになさいました。イスラエルの民らが荒れ野の生活に疲れ、反乱を起こすこともありました。昼は雲の柱、夜は火の柱で導き、異邦人の侵略から守ってくださいました。それだけでなく、十戒と律法を授けてくださり、どのように生きていくのかを示してくださいました。イスラエルの民らはこのような歴史的な経験を通して、荒れ野の生活は苦しい時間であったけれども、神様に仕えながら生きる自由な人間として生まれ変わるための大切な時間であったということを感じました。それで後代の信仰者たちも自由な人間として生まれ変わり、新たに恵みをいただくために荒れ野に出たのです。そして今日の信仰者も、その信仰と恵みを受け継ごうと荒れ野を訪ねていくのです。

けれども、皆が日常生活を諦めて、荒れ野に行くことは難しいのです。現実に対して忠実に生きて行くことも重要です。それで荒れ野を訪れることの代わりに修道院や聖なる場所を訪れたり、荒れ野でとどまることの代わりに節制と克己をしたりしながら大齋節の間を過ごしているのです。大齋節だけでなく、普段の時も神様のみ旨を聞くために、また神様に願い求めるために教会や修道院を訪れてお祈りをしたりしていますが、それも荒れ野を訪ねていく心でやっていることなのでしょう。

イエス様が荒れ野に行かれたのは洗礼者ヨハネから洗礼をお受けになった直後で

す。ある信仰者は、洗礼を通してすべての罪が赦され清められているし、いつでも神様と会えるから、あえて荒れ野に行く必要はないと考えるでしょう。しかし、今日ご一緒に読んだ使徒書のみ言葉のように、「洗礼は、肉の汚れを取り除くことではなくて、神に正しい良心を願い求めることです。」(1ペテロ3:21)。ですから、イエス様が荒れ野に行かれたのは、洗礼の誓いをさらに堅固にするためのものであると言えるでしょう。そして、これから迎える試練や葛藤、現実に安住したい誘惑があっても、粘り強く生きていこうという決意をするためのものであると言えるでしょう。

ところで聖書に注目してみると、独特なところがあります。それは、イエス様が荒れ野に行かれたのがご自分の意志ではないということです。聖書にはこのように記されています。

「それから、“霊”はイエスを荒れ野に送り出した。」(マル1:12)

これは、誰でも望まない時、望まないところに行かせることもあるということを示しています。それは試練と誘惑でもあります。ですから恐れもあります。けれども大事なことは、そこには神様の特別な計画があるということです。事実、誰もがこの世を生きていく間、望まない試練と苦しみ、痛みと悩みの時間も経験します。そして、なぜこのような経験をしなければならないのか分からないことも経験します。しかし信仰者の人生には確かなものがあります。それは、試練と苦しみの向こうには、神様が特別に計画されたことがあり、その試練と苦しみを乗り越えていくと、神様が特別な恵みを与えてくださるということです。現に私たちが経験しているコロナ禍も同じです。このような厳しい試練の向こうには、確かに神様の特別な恵みがあります。

多くの信仰者は試練を経験する時、それがサタンによるものであると思っています。サタンという言葉は、「誘惑する者」あるいは「混乱させる者」という意味があると皆さんに何度も申しあげました。サタンは私たちが誘惑に負けて、試練に倒れることだけを狙っているではありません。サタンが究極的に狙うものは、私たちが神様から遠ざけることです。サタンは、安楽と快樂、怠惰とうぬぼれによって神様より遠ざけさせたり、挫折と絶望する人を混乱させたり、神様のみ言葉を疎かに考えさせたりして、人々が神様を信じないようにするために誘惑し、人の心を混乱させるのです。考えてみてください。神様のみ手によって創造されたものが神様を信じず、頼らなければどうなるのでしょうか。

けれども信仰者は安心できるのです。信仰者は初めから、たとえ試練を経験しても、安心できるものであるからです。今日ご一緒に読んだ福音書には、それを教えてくれるみ言葉がこのように記されています。

「イエスは四十日間そこにとどまり、サタンから誘惑を受けられた。その間、野獣と一緒におられたが、天使たちが仕えていた。」(マルコ1:13)

私たちはこのみ言葉を通して、イエス様が荒れ野にとどまっておられた間、決して一人で困難を経験されていたのではないということが分かります。もちろん、あ

る方にとっては、「イエス様が野獣と一緒におられた」という事実に対し戸惑うかも知れません。これらの野獣が恐ろしいものなのか、それとも人間と共に生きていけるものなのか分かりません。私たちがこの世に生きている間、私たちの周りにも、このように判断できないものも多いのです。けれども、これらの野獣はイエス様を決して害さなかったのです。私たちが注目すべきものは、「天使たちが（イエス様に）仕えていた」ということです。神様が守ってくださったという意味でしょう。ところで、このような神様のみ守りはイエス様だけのためものではありません。私たちも当てはまります。それで、私たちはこのみ言葉によって、たとえ判断しにくく、恐ろしい環境で生きて行かなければならなかったとしても、「信仰者は神様のみ守りのもとにいる」ということが分かります。きっと神様は、イエス様になされたように、私たちにも天使たちを送ってくださり、守ってくださるでしょう。

今日ご一緒に読んだ創世記のみ言葉も、私たちに希望を与えてくれるメッセージです。これは、ノアの洪水の出来事以来、神様がおっしゃった約束です。その時、神様はこのようにおっしゃいました。

「わたしがあなたたちと契約を立てたならば、二度と洪水によって肉なるものがことごとく滅ぼされることはなく、洪水が起こって地を滅ぼすことも決してない。」
(創世記9:11)

そして虹を見せてくださいました。ですから虹は神様がわたしたちを守ってくださるという約束の徴となりました。この虹の約束は、誘惑や試練を乗り越えた者だけでなく、たとえ失敗しても、神様のうちに生きていこうと努力する者なら誰でも当てはまるものです。ですから私たち信仰者が胸のなかに神様のみ言葉を抱いて生きていく限り、虹を抱いて生きていく限り、安心して生きていってもよいのです。

では、イエス様が洗礼をお受けになった後天から聞こえてきたみ言葉にも注目してみましよう。その時、天からこのようなみ言葉が聞こえました。

「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」

このみ言葉は洗礼をお受けになったイエス様のためのみ言葉です。けれども、このみ言葉は、今日の私たちのためのものでもあります。神様はいかなる試練と困難にも私たちを助けてくださり、恵みの人生に導いてくださるといふ希望の約束であります。それゆえ、私たちはサタンの誘惑と試練があっても恐れることはありません。神様のうちに自分の人生を生きていけば良いのです。失敗に対しても恐れることはありません。神様はその失敗を通して私たちをさらに成熟した信仰の道へ導いてくださいます。今日、わたしたちが経験しているコロナ禍も同じです。たとえ、不自由、失業、不安、喪失と別れの困難に直面していても、神様はこの試練からも助けてくださるでしょう。神様は荒れ野で彷徨っていたイスラエルの民らを雲の柱と火の柱をもって導いてくださったように、私たちも雲の柱と火の柱をもって導いてくださるでしょう。ですから、今、大変で苦痛な時ですが、神様を信じてこの困難をともに乗り越えていきましょう。

新たに迎えた大斎節の間、荒れ野で断食しながら、お祈りを通して悪魔の誘惑に

打ち勝たれたイエス様のみ恵みによって、皆様の信仰がますます堅固になり、試練に打ち勝つ勇氣と力が得られますように心よりお祈りいたします。